

落語の間

落語家 桂 歌之助

1. はじめに

本稿は、落語の「間」について論じてほしい、との依頼によるものであるが、それはわれわれ噺家が一生かかって勉強するテーマである。それを若輩者の筆者に論じさせるとは、武庫川女子大学も大胆きわまりないというものであるが、筆者のこれまでに経験した範囲で、話したいと思う。

落語の表現の形は独特である。まず、1つの物語を表現する際、お芝居であれば5人の登場人物を5人の役者で演じ分ける。しかし、落語では登場人物が何人であろうと、1人の落語家がすべてを演じるのである。また、女性、おじいさん、子どもに、犬と、どんな役でも演じる。次に、お芝居では物語に合わせて舞台に背景（書き割り）があるが、落語にはそれがない。金屏風などを置くことはあっても、噺の内容に合った背景を置くということはずもない。先日筆者が公演に行ったある公民館では、「禁煙」という張り紙があったくらいである。そして、お芝居では、役者はそれぞれの役に合わせた衣装を着るが、噺家は1つの衣装で何役でもこなす。当然メイクやかつらも使わない。さらに、お芝居なら実際に舞台上を立ち歩いて移動を表現するところを、落語では座布団の上に正座をしたままで行う。

つまり落語とは、あらゆる場面、あらゆる登場人物、あらゆる動きを、背景も衣装も使わず、たった1人が座った状態で、表現するものである。こういった表現は世界的に見ても落語にしかない。中国やイタリアには小噺程度はあるが、落語ほどの込み入った内容の物語をすべて1人でやり通すというものはない。

そこで大事なのは、お客様に想像してもらうことである。“ここにはないもの”をそれぞれの頭の中で作り上げてもらうのだから、いかに想像してもらえるかが、われわれにとってもっとも重要なことなのである。そのためには、当然のことながら、最後まで集中して聞いてもらうことが大事である。

2. 「間」とは何か

さて、「間」とはいったい何なのであろうか。われわれも楽屋などで「あいつ、間の悪いやつやなあ」などということがある。これは、師匠の機嫌が悪い時にかぎって失敗する弟子などの、タイミングの悪さを表す際にいう。しかし、落語において使う「間」というのはまた違うものである。

落語は、登場人物の会話のみによって物語が進む。まれにナレーションもあるが、ほぼ

すべてがせりふで構成される。小説であれば、「昭和何年、何月何日のことである」といった記述や、映画なら、映し出される風景や人物の衣装から、場所や季節などの設定を知らせることができる。これを落語では、せりふだけで説明していく。すなわち、「暑いですなあ、歩いてたら背中からじりじり焦げてきまっせ」「焦げるというやつがあるかいな」などといったせりふで、夏であることを説明するのである。このように落語では、常にせりふが続いていく。その中で、せりふのなくなる空白の時間を、「間」という。

3. 上方落語と江戸落語

落語には、上方落語と江戸落語の2つがある。どちらかがどちらを輸入したというわけではなく、それぞれ同時期に発生したものである。上方落語では、噺家の座る座布団の前には、「見台^{けんたい}」が置かれている。その前にある小さなついたては、「膝隠し^{ひざかく}」という。見台の上には小さな拍子木、「小拍子^{こびょうし}」があり、この3つを1セットで使う。これらの道具は、江戸落語では使用しない。

上方落語と江戸落語では、まず、その成り立ちから異なる。江戸落語というのは、もともと、お座敷芸の1つとして始まった。つまり室内で、金持ちで教養のある旦那を相手に行うものであった。そこでは、ある和歌、お芝居などを知っているから笑えるというように少しひねった笑いが求められた。現在でも江戸落語では、ばかばかしい笑いというよりは、粋であることや余韻を残すことを大切にしているという傾向がある。

他方、上方落語は、屋外で始まった。祭りの屋台に並んで、落語家が声を出していたのである。祭りで立ち歩く客が相手であるから、まずは注意を引く必要がある。そのために、台をたたいて音を出すことで気を引き、そのまま最後まで飽きさせることがないようにギャグを多く盛り込み、派手に行ったのである。そのため現在でも、上方落語は全体にギャグが多く、派手なものになっている。

4. 『東の旅～発端』での間と小噺での間

落語家には入門して最初に習うネタがある。米朝一門の場合でいえば、『東の旅』がそれにあたる。『東の旅』とは、大阪から伊勢神宮まで歩いて参拝する道中で起こるさまざまなハプニングを描いたネタである。ただし、非常に長いため、場面ごとに独立した噺になっており、まず習うネタは、その旅立ちの場面の『発端』である。

これは、お客さんを前にして笑わせるための落語というよりは、入門したばかりの落語家が基礎を学ぶためのもの、いわば口馴らしといえるものである。見台を叩きながら行うことは、すでに述べたような成り立ちからの名残からであるが、叩く音が大きいため、それに負けないよう大きな声を出す練習にもなる。また、この「叩き」の入れ方で、間のとり方が学べるのである。「間」を習得するのは非常に困難であるため、まずは「叩き」をど

こで何セット入れるというところから師匠に教わるのである。

「間」を入れることは、お客さんに理解しながら聞いてもらうことにもつながる。『発端』は、登場人物の会話で進むのではなくナレーションで進む構成のため、もう少し落語らしいものでそのことを説明していきたい。

『くちなし』という小噺がある。「物言う花」はあるかとやってきた客と植木屋との会話によって進むものである。

落語は、せりふの抑揚、表情、しぐさ、間のとり方といった技術を駆使して行う話芸である。落語に限らず、話すことに関して、第一声の出し方は非常に重要である。『くちなし』でいえば、最初のせりふである「おい植木屋」という声の出し方1つでこの後全体のテンションが決まるのである。スピーチなどで落ち着いた雰囲気話したい時には低く始めるとよいが、落語では笑いをとることが最も重要であるから、「おい植木屋」と高いトーンから始める。それに続けて「へえ、らっしゃい」と低く差をつけていうことによって、登場人物が2人いることも伝えられる。

次に「どんな花でもあるか」「ええ、どんな花でも木でもおまっせ」という会話であるが、ここにもポイントがある。文章を書くときなどにもいえるが、同じ言葉はなるべく繰り返さないことが大事である。同じ言葉が何度も出てくると、お客さんが飽き、だれてきてしまうからである。それを避けるために、「花でも」を「花でも木でも」といい換えているのである。

続いて「お前のとこに、物言う花ちゅうのはあるか」というせりふがある。「物言う花」というキーワードの前には間を入れる。続けていうと聞き流されてしまうが、間をとることによって意識させ、印象に残すことができるのである。なお、この間は、息をとめる。息をしてしまうと、緊張感がなくなり、間が抜けてしまうのである。呼吸と間とはセットなのである。

さらに、「物言う花」という言葉が初めて出てきた直後のせりふをいう前にも、少し間をとる。「物言う花」という突飛な言葉が、客に浸透し理解されるまで、あえて停滞させるのである。間をとらずに続けてしまうと、客が理解する前に話が進み、客を置いていってしまうことになる。

最後に「おい、お前はなんや」「おい、お前はなんや」とまったく同じ言葉を2回続けるところが出てくる。これは先に述べたことと矛盾すると思われるかもしれないが、この場合には、1回目と2回目で、いい方を大きく変えるのである。

5. おわりに

『くちなし』の例で説明したように、このような短い噺の中にも、間のとり方をはじめとした、あらゆる技術が駆使されているのである。これもすべてお客さんについてきてもらい、想像しながら聞いてもらうためのものである。3年前、筆者はイタリアへ行った。イ

タリア人に向けて、イタリア語で落語を披露したのである。ミラノとトスカーナの2カ所で行った落語会は、途中まではまるでクラシックコンサートのように静かだったのであるが、落ちの部分で笑いが起きた。本稿の始めに述べた落語にとって大切なこと、すなわちお客さんに“ここにはないもの”をそれぞれの頭の中で作り上げてもらう、そして想像しながら最後まで内容についてきてもらう、ということができたということである。つまり、そのためのさまざまな技術は、イタリア人のお客さんにも通用したということである。

(2011年7月17日、生活美学研究所本年度第3回定例研究会における講演に基づく)